

「寄稿」

宮下啓三さんのお仕事

— 『山行』のドイツ語訳 —

杉本 賢治

藤沢教会での前夜式に参列したのがきっかけで、緑爽会報がインターネットで読めるのを知りました。さっそくプリントして『遺言を語る』ができて私はいれしく思っています。『に感銘を受けながら「増えた山の名、消えた山の名」を読み終えました。

宮下さんとお会いしたのは「喜の会」が初めてだったと思いますが、宮下さんが農鳥岳で串田孫一さんと遭遇したときに、『アルプ』137号) 同行していた保科清子さんと三井基子さんから、この出会いについて「まいんべるく会」でお聞きしていました。

山仲間三輪利雄くん(永年会員)や山岳会入会で紹介者になって下さった山下一夫さんの子息である隅野成一くんなど五人がいます。三輪くんと克子さん(エーデルワイス・クラブ)の一粒種が今井喜美子さんのお弟子になり、学問でも宮下さんのお弟子さんになったという縁があり、ドイツ在住の仕事仲間が宮下さんの教え子という偶然もあって宮下さんには片想いの親しさを感じていました。

引退後やっと思行けるようになったアルプス周辺の山歩きで知り合ったグリーンデルヴァルトの知人が、**Home Office**なる休暇住宅に改築したのを機に仲間毎年のように同家に滞在して知人一家と親交を深めています。

その知人から、アイガーについてまとめた本が出たからと送られてきたのが『**Eiger The Vertical Arena**』^①でした。アイガー北壁の登山史を歴史のおよび地理的なエピソードを交えながら登攀に関わった人たちの寄稿を編集した本です。題名のように本文も英語で書かれていますが、英語版によると原本は『**Eiger die vertikale Arena**』^②なるドイツ語の本です。編者は **Daniel Anker** (ベルン在住) となっています。

目次を追いますと、取付きから頂上まで、北壁の古典ルートに沿った要所とそこにかかわるエピソードが書かれていることがわかります。A頂上氷田VとAミッテルレギ稜Vの間に「グリーンデルヴァルトと日本におけるアイガーの意義」なる章があり、Aミッテルレギ稜VとA頂上Vの間に「アイガー北東稜の初登攀」という章が置かれています。



アイガー東山稜初登頂を果たし地元の人たちやガイドらと喜び合う榎有恒(中央)

「アイガー北東稜の初登攀」はとりわけ重要な章で、ほとんど全文が榎さんの『山行』をそのまま読んでいくようでした。榎さんが撮った写真も挿入されています。これだけの長い記録をどなたが訳されたのだろうかといぶかりながらも、一読するだけで終えてしまっていました。

緑爽会報106号で遺稿を拝読して、はじめてこの翻訳が宮下さんの手によるものだと知りましたが、残念な記述もありました。「日本山岳会の会員たちに気付いてもらえないので、自分からこの事実を報告させていただいた次第です」とあるのです。あらためて手元の英語版を見直しました。見落としがあつたかも知れませんが、どこにも宮下啓三の名が見当たりません。英語版しか読んでない自分の怠慢を棚に上げて、近藤緑さんにお手紙をさしあげました。本のどこにも翻訳者が紹介されてないのだから、会員が気づかれないのも無理ないのではないかと生意気なことを書いてしまったのです。

近藤さんから即座にご返信をいただきました。山岳会図書室にあるドイツ語版を見るようにとのご示唆でした。その通りです。宮下さんご自身が、「ドイツ語に翻訳しました。日本山岳会の図書室にある『Eiger アイガー』という美しい書物の中に私の訳が収められています。」と書かれているのですから、これを読まずして、勝手なことはいえませぬ。

図書室で探し出していたドイツ語版は頁数が英語版より多く、写真を挿入した頁も違います。Aミッテルレギ稜Vの頁に直行し、宮下さんの名を探しました。英語版の扉には寄稿者とならんで翻訳者の名前が書いてあるくらいだから、ドイツ語から英語への翻訳には十分な

注意が払われていて、内容は同一だろうと考えていたのが大間違いでした。ドイツ語版には宮下さんがドイツ語への初翻訳者であるときちんと紹介されています。また寄稿者としての宮下さんの紹介も別頁にあります。それらは次の通りで、英語版にはまったく欠落している字句です。

A. 登山史で重要な『山行』の一章を初めてドイツ語に翻訳されたのが宮下啓三氏である。(ドイツ語版264頁アイガー北東稜の初登攀)

B. 宮下啓三 (1936年生) 榎有恒氏の文を翻訳した。東京の慶応大学ドイツ文学教授、日本山岳会会員。著作に『スイス・アルプス風土記』(1977)、『ウィリアム・テル伝説』(1979)、『700歳のスイス』(1991)がある。いずれも日本語。(ドイツ語版260頁)

他の頁にも宮下さんのお名前が出ているかと思いますが、ひさしぶりの読書で目が疲れました。ここまで導いて下さった近藤緑さんに感謝し、宮下さんの霊安かれと祈りつつ、これにて終えます。

脚注

① 2000年 The Mountaineers Books (シアトル) 出版

② 1998年 AS Verlag & Buchkonzept AG (ツューリッヒ) 出版

編集後記 ★寄稿された杉本さんは往時の串田孫一アンサンブルのメンバー。斜里のアルプ館での記念演奏を前に猛練習中とか。★「東北支援の夕べ」に向け、こちらもリハーサルに懸命。(K)